

Title	アイリーン・グレイの屏風・インテリア・建築について：屏風と住宅E. 1027に共通する欠けた矩形と空隙
Author(s)	川上, 比奈子
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53543
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アイリーン・グレイの屏風・インテリア・建築について

屏風と住宅 E. 1027に共通する欠けた矩形と空隙

川上比奈子／夙川学院短期大学

1. はじめに

アイルランド出身のアイリーン・グレイ (Eileen Gray, 1878-1976) は、1906年頃より、パリに滞在していた漆芸家、菅原精造 (1884-1937) に日本漆芸の教えを受けて屏風、家具、室内を漆塗りによって制作した。1925年頃には、ルーマニア出身の建築評論家ジャン・バドヴィッチ (Jean Badovici, 1893-1956) に勧められて住宅 E. 1027 (1926-1929) をはじめ、先鋭的な建築をデザインした。この経歴のため、グレイの作品の解釈は、装飾芸術もしくは建築のいずれかに重点が置かれがちだが、両者には強い共通性がある。

富永譲は、住宅 E. 1027の形態について「壁面から細部の形に至るまで随所に見られる『欠きとった矩形』のモチーフ。不安定であり、動きを与える。」と指摘する。「欠きとった矩形」とは、矩形の一部がない欠けた幾何学形であり、空隙を持つ図象である。欠けた矩形と空隙は、E. 1027の壁面や細部だけでなく、デザイン手法が図式化された4つの模式図に特徴的な形象である。一方、屏風にも欠けた矩形と空隙を構成要素にした作品群がある。以下では、屏風・インテリア・建築に共通する欠けた矩形と空隙がどのように生み出され、展開したかを考察する。

2. 屏風の欠けた矩形と空隙

1922年から1925年頃、グレイが制作した直線と円弧線の描かれた屏風 (図1) が折り曲げられると、漆塗りに独特の光沢によって隣の面に線や図が映り込み、複数の焦点を持つ立体が浮かび上がって見える。グレイは、漆塗

りの映像性と屏風の可変性という2つの特性を組み合わせて、特化して独自の屏風を作り出したのである。ほぼ同時期にグレイは、ブリックスクリン (図2) と名付けられた屏風を11種類制作した。通常、図柄の描かれた縦長長方形の曲を少数枚で横につなぎ合わせるのに対し、ブリックスクリンは平面上の図柄を45枚や50枚におよぶ横長の長方形に分解し、縦軸でつなぎつつ回転させ立体を再構成した屏風である。グレイは二次元の平面に映りこんで見えていただけの立体を、三次元に取りだして実体として見せたのである。この傾向は E. 1027の居間に置かれた不定形屏風 (図3)、最晩年に制作されたコルク製屏風 (図4) にも見て取れる。これらの屏風は非対称に分割され欠けた矩形と空隙を生成し、折り曲げ角度によって、その容態が一変する。



図1

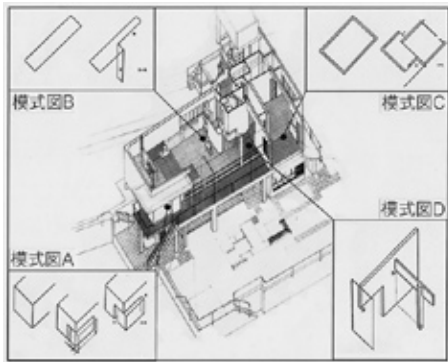
図2

図3

図4

3. 住宅 E. 1027の模式図

グレイによって描かれた E. 1027の4つの模式図に、欠けた矩形と空隙を見いだすことができる。図Aには、西と南の壁面に欠けた矩形、西面に接し建物の内部に空隙が生成している。この空隙は、仮眠コーナーを主室から分節する役割を果たすとともに、シャワースペースとテラスを繋ぐ通路、出入り口として機能する。図Bでは、テーブルの天井の一部が折り曲げられて、欠けた矩形と空隙が生



成している。空隙に主人が立って飲み物を用意することが想定されており、いわば、身体と合体するカウンターバーとして機能するものである。図Cには、2方向の平行移動によって仕事室の床平面が欠けた矩形として残され、東面外部と西面内部に二つの空隙が生成している。空隙の一方はテラスとして利用され、他方は主室・仕事室・階段・サンタリーを繋ぐ動線の要として機能する。図Dでは、建築内部に壁面の一部を平行移動させて生成した欠けた矩形となる床が、タイルの貼り分けで示されている。空けられたヴォリュームは、テラスと一体化する食事スペースとして機能する。

以上のように4つの操作によって生成した空隙はいずれも、家具や身体を受け入れる動態の場となっているのである。

4. 鏡とティーテーブルとテラス階段



この他、E. 1027において欠けた矩形と空隙が明瞭なものに、寝室の洗面コーナーに備えられた鏡がある。この鏡は垂直長方形の左上で小さな矩形がヒンジによって折れ曲がり、欠けた矩形と空隙を生成させる。長方形から非対称な形状へ変化する点で、不定形屏風との類似性が特に強く、またティーテーブルと緊密な関係にある。ティーテーブ

ルの回転軸の方向を90度転回すれば、不定形屏風と同様になり、つまり図Bの操作が、鏡を介して屏風の制作手法と繋がるのが了解されよう。さらにE. 1027のテラス階段もまた、操作Bを拡大して適用した例として捉えられる。屏風の造形手法が90度転回して図Bの操作へ飛躍的展開を遂げ、建築エレメントのデザインに接続したといえる。

5. おわりに

グレイの欠けた矩形と空隙は、漆塗り屏風に映り込んで見える虚像を現実化させたいと欲する創造的衝動から生じた。その後、ブリックスクリン、不定形屏風、コルク製屏風に展開するとともにE. 1027のデザイン手法、図Bの操作が発案された。操作Bは平面の一部を折り曲げ、二次元から三次元を作り出す手法である。この位相の多重性を三次元に拡大して住み手の身体までを包み込む手法が、他の3つの手法である。これらのことから、欠けた矩形と空隙をもつ屏風は、グレイがインテリア・建築をデザインする際の概念モデルとして位置づけられる。モデルが包含する内容は、生活の中で絶え間なく変化する空間・時間の状況を動態のまま扱おうとするグレイのデザイン理念といえよう。

引用文献および図版出典

- 富永譲編著『近代建築の空間再読』彰国社、1986年
 Adam, Peter: *Eileen Gray Architect/Designer*, Harry n. Abrams, 1987
L'Architecture Vivante, Albert Morance, Hiver, 1929
 Loye, Brigitte: *Eileen Gray 1879-1976*, Analeph/J. P. Viguier, 1984